

2011年6月

「イルカのように生きてみよう」小原田泰久さん

〈二人の先生との出会い〉

1990年頃から癒しをテーマに仕事をしています。ぼくはいいタイミングで誰かと出会い、仕事にめぐりあっているんですが、あくせくせずに目の前に起こることを一つずつつかんでいけば、やるべきことの場に連れていかれる気がしてならないのです。妙に力むと、右から左にうまく流れているものが違う道筋に流れてしまう、そういうことが自分のテーマで、それを発信していこうと思っています。

ぼくの気功の先生、中川雅仁先生は1995年に亡くなったのですが、たいへんな方でした。もともとは時計技術者などをやり、健康関係の器具販売もし、「手から気を出せ」という夢を見て突然やり始めたという人なんです。

1988年に中国に気功の取材で行ったのが、ぼくの大きな転機になりました。上海で行われた国際気功大会があるので来てみたら？ と呼ばれたのですがその大会で、帯津良一先生と中川先生の講演がありました。末期がん患者さんが点滴しながら気功をやっている姿をスライドで帯津先生が映しました。ぼくはそのころ、周囲に誰もがんになった人がいなかったの、がんになったら、寝たままでみんなが泣いていると思い込んでいました。なんとか治そうと気功をやっているその人の姿を見た瞬間に、どんな超能力を見るよりもショックを受けました。

そして、中川先生はハイゲンキという機械から気が出て万病が治ると言うんですが、ぼくはそういうことはありえないと頭から否定していたのです。しかし、上海滞在中に、鈴木さんという友達が、仕事中にぎっくり腰になって歩けなくなってしまったので、「白ひげのすごい先生が日本から来ているから、行っておいで」と言いました。中川先生の講演を信じていたわけではないのですが、口が勝手にしゃべっているという感じでした。翌日戻ってくると、鈴木さんがホテルの中を走り回っています。

「え、どうしたの?」「三十秒で治っちゃったよ」

これはすごいと思い、日本に戻ってから、中川先生に取材しましたが、気安い先生で「なんでも治っちゃうよ」と言うんです。実際に患者さんに取材してまわったら、難病になった息子さんにハイゲンキを母親が毎日かけたところ治ってしまったと聞いたので、ぼくは三十何万円もするその機械を、自分で買いました。全身の関節が痛くて車椅子に乗っていた人の曲がらない右手を二・三か所かけて気を注入しました。

はい、どうですかとかけてみました。ひざ裏にかけるようにと言われていたので、ぴっぴっと機械が鳴るポイントに十秒ほどあてるだけなんです。何も知らない初めてのぼくがかけたのに、その人は車椅子からおりることができました。

『週刊ポスト』にこのハイゲンキと蛇の毒の抗がん剤の記事が採用されて、評判になりましたが、ある日中川先生から呼ばれて、「世界中を回るから記録して文字にしてくれないか」と言われたのです。これからヨーロッパだというので、それから 95 年まで中川先生が行くところをずっとついてまわったのです。

「耳が悪い人はいませんか?」と、十秒から十五秒講演を聞きに来た肩に手をあてるだけで即座に聞こえるようになることが、目の前でどンドン起こりました。

<代替療法について>

上海で会ったもう一人の先生、帯津先生とは、『がんを治す大辞典』というタイトルで、世の中にあるがんの療法を単行本にしようということになりました。何も知らない状況で取材を始めたので、玄米でがんが治るなんてことはありえないと思っていましたが、取材してびっくりしました。西洋医学にどっぷりつかって病気になれば病院に行って薬をもらうのが当たり前というそれまでのぼくには、びっくりするような事柄がたくさん起こっており、自分の価値観がぐらぐら変わりました。

いろんな治療法や情報、玄米菜食、あやしげなものもたくさんありましたが、日本中をみてまわり、帯津先生に報告しました。先生が驚くだろうと思って喜んで報告するのですが、帯津先生はあまり喜ばない。

帯津先生がさまざまな療法を知っても驚かなかったのは、大事ではあるけれどそれは単なる方法論だからです。「いちばん大切な基礎はまず心。家でいえばその一階部分がしっかりしていなければダメじゃないの?」と先生は言うておられました。

明るく前向きに生きるのが大事、と帯津先生も昔は思っていたようですが、でも違うと、今はおっしゃるのです。明るく前向きに生きているように見える患者さんを院長室に呼んでその人の検査結果が悪くなっていることを伝えると、その人は落ち込んでしまう。「明るく前向き」がいかに脆いものかをその時に知ったそうです。

「もともとかなしみと孤独が人間の原点にあることをふまえて生きること。明るく前向きという脆いところに立って生きていると、ちょっとしたことで振り回される。明るく前向きな人とは付き合わないほうがいい。人間の本質がわかっていない」と帯津先生はおっしゃいます。一階をしっかりとった上で、二階部分に気功や食事、呼吸など生活の基本をどう大切なものをつくっていくか。食事はときめき=心と強く結びついています。いやいや玄米を食べてもプラスにならず、ときめくような食事をしようということですね。基

本は和食で、時々好きなものを食べればいい。気功は上手にならなくていいから、週一回でよいので続けることが大切です。

そして家の三階部分が個別の方法論です。一階・二階をしっかりとした上で三階を建てることです。抗がん剤も手術も三階部分なので、一階・二階がしっかりとしていれば、その時何がいちばん大切なのかわかるはず。方法論・代替医療がかぎりなくあるなかで自分の状況や好みに応じたものをチョイスしていく。

ぼくも右往左往しながら個別の方法論を追いかけていた時期がありました。『がんを治す大辞典』が出版されてからかなりたちましたので、亡くなった先生もたくさんおられ、新しいものもたくさん出てきているので、ぼくは今その新たな取材で動き始めています。西洋医学が悪くて代替医療が良いというのではなく、帯津先生が提唱されているホリスティック医療の考え方のように医療が統合されていく方向が求められ、これからはそちらに向かっていくと思います。

<ホピの預言>

宮田雪(きよし)監督が撮った『ホピの預言』という映画を見ると、その内容が 3.11 後のぼくたちに切実に伝わってきます。今話さないといけないかなと思うので、今日はホピの預言についてもお話ししようと思います。

ホピはアメリカ・インディアンの最古の部族と言われています。阪神大震災の前に、宮田雪監督、帯津先生、中川先生の三人でアメリカ・アリゾナのホピの村に一緒に行きました。

それまで中川先生はミンスクというソ連の町の病院で、チェルノブイリの被爆者治療を行っていました。ナバホ族には被爆者の人が多かったので、その関係です。ナバホ族の居住区でウラン採掘が始まり、仕事がないナバホの人たちが、放射能が危険だと伝えられずマスクもせずに採掘しました。高濃度の放射線廃棄物を家の建築材料として使い病気になってがんになって苦しんでいる人もたくさんいます。気功で被爆の辛い症状が取れるのを、ぼくは実際に見聞きしてきました。

ホピ族はアリゾナの砂漠の真ん中に住んでいます。ほとんどのインディアン部族は砂漠に追いやられて、インディアン居住区の中に閉じ込められてしまったのですが、ホピ族だけは「聖なる場所なのでわれわれが守らなくてははいけない」と考え、先祖代々そこに住んでいました。

ホピ族には、聖なる存在＝グレート・スピリットから伝えられたと考えられている預言が残されています。

「けっして母親の心臓を抉り出すようなことがあってはならない。もしそれを抉り出し

たときには、灰がぎっしり詰まったひょうたんとなって空から降り、やがて世界を破滅させるだろう。これが空から落ちたきたあかつきには、海は煮えたぎり大地は赤く焼きただれ何年ものあいだそこには何も育たず、どんな薬や医者も役に立たない悪い病気が蔓延するだろう」

こんな預言が長老から長老へ口づたえで伝わってきているのです。この預言が長老会議で話題になったのが、1948年。そのとき彼らは広島・長崎の原爆を知ったのです。

「灰の詰まったひょうたんが落とされたとき、それは浄化の日の始まりだ」と言われています。病気で好転反応のように、地球でも竜巻や地震などわたしたちに都合が悪いと思われているものが起こることで浄化がすすんでいくことがあるのです。四人のメッセンジャーが選ばれ、世界に散ってメッセージを発信するということがありました。

「母親の心臓」というのは、ホピ族が守っている土地のことです。インディアンは地球を生き物、母親として考えています。インディアンの人たちが追いやられた土地の地下には、ウランや石炭・天然ガスなど鉱物資源が豊富に埋蔵されており、心臓部と表現されているのも納得です。

この預言を残そうと1900年頃に彫られた岩が、村のはずれにあります。この岩には人間の過去・現在・未来が描かれていると言われます。らくがきのような絵ですが、意味のある絵なのです。あるときから人々は物質を神様とする道をどんどんたどり始めた。岩に描かれている線がゆがみをあらわし、二つの世界大戦と原爆をあらわすと解釈されています。

絵によると、現在のわたしたちの先に二つの道が分かれています。まだ物質を求める人々は、ギザギザの破滅の道を進んでしまい、下りる道を進む人々は、本来の神が示した道を歩んでいきます。いまたくさんの人々が心の大切さや魂について学び始めていることを示しているのでしょうか。しかし、不気味な丸が先に描かれています。浄化なのかもしれません。何か大きなことが起こり、その後また新しい世界が始まるという意味合いと理解されています。

一番目、二番目、三番目の世界がなくなり、今は四番目の世界なのだそうです。人間のテクノロジーの発展によってこれまで三つの世界が減ってきたという人もいます。しかし、浄化は破滅とは違いその後新しい世界が始まります。今の世の中は不安をあおることが多いのだけれど、次に向かうという姿勢で見えていきましょう。物質以外に大切なものがあることを見て勇気をもって降りていくことが大切なのではないかと考えています。

自分たちの将来は、自分たちの選択にまかされています。いま、わたしたちは世の中の役にたち自分たちも成長していく生き方をするのかどうかの分かれ目にあるのかなと思います。このホピの預言を、希望への羅針盤ととってもらったら嬉しく思います。

<イルカが人を癒す>

イルカとは1990年頃から20年ほどの付き合いです。もともとイルカが好きだったわけではなく、中川先生にイルカと泳ぐとうつ病が治るという話を聞いて、取材で行ったのですが、これでぼくの人生が変わってしまいました。

中川先生の気功の百回目のセミナーに特別ゲストとして誰かを呼ぶことになったとき、通訳の静子さんに相談したら、「イルカの先生がいい」と言う。そのイルカの先生は、ドブス先生といって、精神的に病んだ人たちをイルカと泳がせて元気にしようという運動をしている先生でした。

そのドブス先生は、男の人に乱暴されて人間不信のまま生きてきたおばあちゃんが、イルカと泳いで「こんな楽しかったことはない」と満面の笑顔になった話、息子さんがボートに乗っていると、イルカが来て息子さんは海に投げ出されたけれども、イルカが息子さんを乗せて湾を一周した話をしました。その講演がきっかけで、中川先生が「イルカに会いに行きたいな」と言って、ぼくも一緒に行くことになってしまったのです。

イルカが来ると、それまで腰が痛い足が痛い、と言って中川先生に治療を受けていたおばさんたちが、ぱっと走り出して海に飛び込むのです。ぼくは海がこわいからもたもた用意をしました。実はぼくは泳げないんです。しかし、いやいや海に入っても、海に入るとイルカを見た瞬間に自分のエネルギーが変わってしまいました。

ぼくが海に入った瞬間を、五十頭のイルカがぜんぶ注目していたという感じなのです。その瞬間、海への恐怖がなくなりました。いったん浮かんで足を動かし進んでいると、一頭のイルカが来てぼくの脇のすれすれを通りすぎ、「こっちへおいで」という感じでヒレを振って先導します。ついていくとイルカがどこかへ行ってしまう。そんなことが繰り返されました。ピュピュピュ、チチチとイルカが鳴く声は十ほどあるのですが、それが聞こえてきてぼくはもう夢中でした。

イルカセラピーは二種類あるそうです。ひとつは医学的、心理学的なもので、アメリカでイルカ療法として使われています。もうひとつはドルフィンヒーリング、ぼくが中川先生とやろうとしたことで、イルカに何か不思議な力があって、一緒に泳ぐことで何かが起こるというものです。

この療法は、ベッツィ・スミスさんがイルカと泳ぐことで自閉症の子供を治すというのがきっかけでした。もともとベッツィ・スミスさんはお医者さんでしたが、研究しているうちに科学的なものを超えたものがイルカにあると感じて、ある時点からスピリチュアルに入ったと聞いています。触るだけでマヒが取れた子供もいるとの報告もあり、イルカは気功師のような理屈ではわからない力があるのでは、と感じています。

ハワイにツアーで行ったとき、からだの具合が悪くなってしまった子がいました。具合

が悪いのでたまたまして、その子が飛び込んだ頃にはイルカは遠くに行ってしまうていました。でも、まるで添い寝をするかのようにまたイルカが来たんです。イルカはアイコンタクトをしますので目と目があいます。そんな体験をしたその子は海からあがると元気いっぱいになりました。

イルカに夢中になって会社をやめてしまい、世界中のイルカスポットを回っていた女性がありました。イルカには近づいてきても触らないというのがルールなんです、バハマではとても人間に馴れているイルカもいてあちらから触れてくるらしいのです。水に彼女が浮かび上がろうとすると、イルカも一緒に浮かび上がってくる。そしてイルカと向き合ったのです。それまで彼女はイルカにはぜったい触らないと決めていたんだけど、思わずぎゅっと抱きしめたんだそうです。そうすると、イルカもヒレを彼女の背中に回して強烈なハグをしました。その様子がその時の記録ビデオに残っています。そんな体験をしたら人生観が変わりますよね。

イルカは目の前の人を何を考えて何を求めているのかをキャッチし、それを満足させてくれる行動をとってくれるのではないかという気がしています。イルカと一緒に泳ぐことで、自分の鎖が取れていくのではないのでしょうか。

病気を治すのは実はイルカたちには簡単なことかもしれないけれど、それと関係なく彼らが存在することでぼくたちの心がほどけていって、その結果として病気が治ったり人生が変わるのかもしれないと思います。

<我が家の水中出産>

我が家ではイルカから発展して水中出産しました。水中出産を日本で初めて始めた海老名の片桐先生は、あねご肌で頼もしい人でした。プールの中で出産するのですが、妻はその前に 35-6 度のぬるめの塩の入っている大きめの風呂に入りました。入った瞬間にラクになったと妻は言っていました。陣痛がきてはひいていく繰り返しですが、痛みがひいているときに妻が「陣痛と陣痛の間が最高に幸せだ。こんな幸せを感じたことない、変わってあげたい」と言ったのが忘れられません。

水中出産で生まれた長女は口も目もあけてリラックスして生まれてきました。自分の赤ちゃんのイメージと違って抱き上げて泣かないのです。片桐先生の「赤ちゃんが泣くのは、おなかの中にいてから生まれるまでの不満を訴えているのよ」という言葉で、心配から幸せ感に一気に変わってしまいました。へその緒を切ったのはぼくです。

二年後の二人目の出産では、自宅で組み立て式のプールを借りてその中で出産しました。三番目も同じような出産でした。長女は四歳でしたが、出産のときばちばちとプールの中で一緒に遊び、生まれる瞬間にいちばんそばにいて、頭が出てきたときにいちばん先

にさわっています。何よりの性教育ですね。

三人ともそれなりに悩みを抱えています。みんなそれぞれ将来やりたいことがあり自由に自分の生きる道を感じていて、これは水中出産をした効用かもと感じています。

「コップの中のノミ」という言葉があります。ノミを調教するときに、ガラスのコップに入れてガラス板でふたをしておくと、本来なら 50 センチ跳び上がれるノミが、ふたをはずしてもいつのまにか 15 センチしか跳び上がれなくなる。これは思い込みが能力を規制するんですね。その思い込みを外すひとつの方法が、イルカと泳ぐことかもしれません。

イルカと泳いだ後の脳波を計った人がいます。ぼくたちが生まれたての頃はシータ波なのですが、まもなくアルファ波が主になりベータ波が普通に生活しているときの基調になる。脳波は周波数ですから、ラジオのチャンネルと同じでシータ波になれば生まれたばかりの自分とつながることができるかもしれない。催眠にもそういうところがありますよね。

生まれたときの自分は、自分が何をすべきかということも全部知っているが、脳波が変わってしまい全部それを忘れてしまっている。もともと心や魂を大切にすることをしようとして生まれてきたのに、強烈な物欲に振り回されて忘れる。イルカと泳いでシータ波になると、何のために生まれてきたのかをもう一度思い出すのではないかと思うのです。

「ゆっくりのんびりとイルカのように生きてみよう」と言う言葉は、自分の合言葉なんです。十何年前に書いた本のタイトルで、名刺に刷ったりして使っています。

名古屋からいきなり東京に来てフリーライターを始めたときは、「一冊でいいから本を出したい」と思っていたのですが、イルカの本を皮切りに、20 冊以上本を出すことができました。自分が持っていた夢以上の世界にいるのですが、これからもメッセージとしていろんなことを発信できればと思っています。